

# 身体的特徴の自己認識といじめ被害傾向の関連性をめぐる 小学生文化に関する一考察

比較教育社会学コース 鈴木 翔

Elementary School Students' Sub-culture of Relations between Self-Recognition of Physical Features and Tendency of Being Bullied

Sho SUZUKI

This paper clarifies whether there is a relation between the self-recognition of physical features of elementary school students and the tendency of being bullied. It also clarifies the type of elementary school students' sub-culture that was prevalent if such a relation existed. We discovered the following two points from the analysis of the questionnaire survey conducted among fourth to sixth grade students in the elementary school.

First, in the elementary school students' sub-culture of both male and female students, appearance complexes and the tendency of being bullied are related. This is more pronounced for female students than for male students. Second, among male students who are adapting to a group of fellow students, appearance complexes and a tendency for being bullied related. On the contrary, only among female students who have not adapted to the group of fellow students are appearance complexes and a tendency for being bullied related. Accordingly, the following may be deduced.

Although physical features and the tendency for being bullied are related, this is dependent on whether male and female students have adapted to their fellow students.

## 目次

1. 問題の所在と課題の導出
2. 使用するデータの概要と変数の設定
3. 分析結果
  - A. 課題1「どの容姿へのコンプレックスをもつ児童がいじめ被害傾向が高いのか」の検証
  - B. 課題2「容姿へのコンプレックスといじめ被害傾向の関連性は、仲間集団への関わり方によって異なるのか」の検証
    1. クロス集計
    2. ロジスティック回帰分析
4. 結論

### 1. 問題の所在と課題の導出

本稿の目的は、児童の身体的特徴の自己認識といじめ被害の傾向には関連性があるのか、もし関連性があるとすれば、その関連性は彼らのどのような小学生文化のもとで機能しているのかを明らかにすることである。

日本では、身体的特徴によって劣等感や不幸が引き

起こされるという認識が広く共有されてきた。その中でも、身体的特徴の特異性がいじめ被害の直接的な要因として語られること自体はさほど珍しいことではない。たとえば、谷本（2008）<sup>1)</sup> や北条（2015）<sup>2)</sup> は、過去にフジテレビ系で放送されていた「ビューティーコロシウム」などのテレビ番組の出演者を例に挙げ、実際には、他人からいじめられたことによって、自らの不幸が引き起こされているにもかかわらず、身体的特徴の特異性により、不幸が引き起こされたかのような語り方が、ある程度説得力を持って受け取られていることを指摘している<sup>3)</sup>。では、これまでの研究で、このような身体的特徴といじめ被害の関連性はどのように考えられてきたのだろうか。

竹川（1993）<sup>4)</sup> によれば、いじめが発生するときには、被害者がヴァルネラビリティ（攻撃誘発性）を持ち、加害者が攻撃意識を持つ場合にいじめが生起するという。そのヴァルネラビリティの一例として挙げられているのが「特異な身体的違和感」であり、集団内で「特異な身体的違和感」を持つことがいじめの攻撃性を誘発する要因となりうることを指摘している。ただし、この指摘は必ずしも「特異な身体的違和感」を

持つ児童がいじめの被害に遭いやすいということを示唆しているわけではない。というのも、これまでの研究において、いじめをした理由の口実、加害者によって事後的に構成される可能性があることが指摘されているからだ（久保田 2013<sup>5)</sup> など）。この点は、本稿の分析結果を解釈する際にも、十分に注意する必要があるだろう。

では、本稿が分析対象とする小学生のいじめは、他の学校段階と比較してどのような特徴があると言われるのだろうか。その点に関して、三島 (2003)<sup>6)</sup> や藤原・鶴飼 (2009)<sup>7)</sup> は、小学生のいじめにおいては、親密な友人関係の間で生起したいじめが不可視化・長期化しやすく、被害者に心理的影響を及ぼしやすいことを指摘している。また、女子のほうが男子に比べ、親密な仲間集団から異質性を排除しようという傾向が強く、男子はその傾向が弱いことを明らかにしている。さらに久保田 (2003)<sup>8)</sup> によれば、小学生がいじめをする理由として、女子は「相手に悪いところがあるから」と回答する傾向が強いのに対し、男子は「遊びやふざけだと思っていたから」と回答する傾向が強いという。

これら一連の研究結果を踏まえると、女子は仲間から異質性を排除する目的でいじめを行う傾向があるのに対し、男子は仲間内で異質性の排除を目的とせず、仲間うちで「あそび」や「ふざけ」という理由でいじめを行っているという対比ができる。いずれにしても、小学生のいじめを分析の対象にするときには、性差と児童が仲間集団とどのように関わっているのかを考慮する必要があるだろう。

これらの指摘を踏まえて、本稿では異質性排除の一例である身体的特徴の違和感といじめ被害傾向の関連性について実証的な検証を行い、それらの関連性を性差と仲間集団との関わり方の違いから考察することにより、児童の身体的特徴の自己認識がいじめ被害の傾向と関連し得る小学生文化の諸相を明らかにすることを目的とする。なお、これまでの研究で言及されている身体的特徴の違和感については、周囲の総合的な認識といじめ被害者である本人の認識が混在していたり、あるいは両者が相互に影響を与え合っていたりすることが想定されるため、指標化が困難である。そこで、本稿では、個人が抱いている容姿へのコンプレックスの有無を身体的特徴の自己認識の代理指標として設定することにより、分析を進めていくことにしたい。

なお、本稿の分析では、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向の直接的な因果関係は特定できず、あくま

で関連性の分析に留まるものであり、因果の向きについては解釈の余地が大きいことには注意が必要である。

以上より、本稿が明らかにすべき課題は以下の 2 点である。

**課題 1：どの容姿へのコンプレックスをもつ児童がいじめ被害傾向が高いのか。**

**課題 2：容姿へのコンプレックスといじめ被害傾向の関連性は、仲間集団への関わり方によって異なるのか。**

## 2. 使用するデータの概要と変数の設定

本稿の分析に用いるデータは、ベネッセ教育研究所（現ベネッセ教育総合研究所）が、東京都および埼玉県の小学 4～6 年生を対象に、2001 年 2 月から 3 月にかけて実施した「子どもの痩せ願望」に関する質問紙調査である。調査項目は、主に回答者の容姿へのコンプレックスの有無や学校生活、自己認識に関するものであり、それぞれの学校を通じて調査票を配布し回収している。最終的な有効回答数は、1097 名である。なお、本調査の詳細な概要は、ベネッセ教育研究所編 (2001)<sup>9)</sup> に記載されている。

本データの特徴は、身長や体重はもちろんのこと、そのほかに考えられる回答者の容姿のコンプレックスの有無が多岐にわたって調査項目として設定されていることである。もちろん、調査時期が 2001 年とやや古く、分析結果を解釈する際には注意が必要であることは間違いないが、学齢期の児童に対する調査では敬遠されがちな身体的特徴やそのコンプレックスの有無に関して、これほど豊富な項目が設定されている調査はほかに類を見ない。よって当該データは、本稿の問題関心を検証するのに現状では最も適したデータであると考えることができる。

続いて、本稿の分析に使用する変数について説明する。本稿では、容姿へのコンプレックスを測る指標として「自分の体で気になるところ」（多項選択式）という質問項目を用いて分析を行っていく。その回答の分布を男女別に示したのが表 1 である。表 1 を見ると、男子児童がコンプレックスをもっているのは「身長」であり、続いて「体重」「歯」であることが確認できる。逆にコンプレックスを持っていないのは、順に「おしりの大きさ」「むねの大きさ」「顔の大きさ」である。

そして、女子児童がコンプレックスを持っているのは「体重」であり、続いて「足の太さ」「身長」であ

ることが確認できる。逆にコンプレックスを持っていないのは「手の長さ」「ひふの色」「自分のにおい」である。この結果から、男女ともにコンプレックスを持ちやすいのは「身長」「体重」であることがわかる。

また、男女差のカイ二乗検定の結果を確認すると、20の項目のうち13項目において、女子の割合が男子よりも0.1%水準で有意に高いことがわかる。以上より、男子よりも女子のほうが自身の容姿にコンプレックスを持ちやすい傾向にあることが確認された。

本稿では、この20項目のコンプレックスの有無を問う設問を指標とし設定し、課題の分析を行っていくこととする。なお、第1章において、課題2の検証では、児童の仲間集団への関わり方の違いに着目することを言及したが、この仲間集団への関わり方を測る変数としては「たいていの人から好かれる」（5件法）と「友だちが多いほうだ」（5件法）という質問項目を合成し、中央値より大きな値を示した児童を「集団適応性高群」、小さな値を示した児童を「集団適応性低群」として互いに比較しながら分析を行う。当該変数の $\alpha$ 係数は0.675であり、分析に使用する変数としては問題ないと考えることができる。平均値は6.597、標準偏差は1.831である。

### 3. 分析結果

#### 3. A. 課題1「どの容姿へのコンプレックスをもつ児童がいじめ被害傾向が高いのか」の検証

本節では課題1の検証を行う。「自分はいじめられやすいタイプだ」（5件法）という質問項目に対し「とても思う」「そう思う」「少し思う」と肯定的な回答した割合をそれぞれのコンプレックスの有無ごとに比較したのが表2である。全体で当該質問項目に肯定的な回答をした児童の割合は、男子で32.3%、女子で30.8%である。

なお表中の括弧内の数値は各コンプレックスの有無に該当する児童数を示し、パーセンテージは該当する児童のうち、「いじめられやすいタイプだ」という質問項目に対して、肯定的な回答をした児童の割合を示す。つまり、各容姿が「気になる」と回答した児童と「気にならない」と回答した児童それぞれの「いじめられやすいタイプだ」と回答した割合を互いに比較することにより、どのような容姿のコンプレックスをもつことが、いじめられやすいという自己認識と関連性をもつのかを検証することが可能になるということだ。

表2を見ると、男子と女子がともにいじめ被害と関

表1 容姿のコンプレックスの有無（男女比較）

自分の体で 気になるところ	男子 (n=557)	女子 (n=540)	カイ2乗値
<b>(顔立ち)</b>			
顔の形	6.8%	7.6%	0.243
顔の大きさ	3.8%	9.4%	14.395 ***
目	12.7%	14.4%	0.673
鼻	7.0%	14.6%	16.619 ***
歯	26.2%	25.0%	0.211
おでこ	4.5%	11.5%	18.364 ***
かみの毛	10.4%	23.7%	34.397 ***
<b>(スタイル)</b>			
身長	26.4%	27.2%	0.096
体重	26.2%	44.3%	39.205 ***
ウエストのサイズ	3.9%	20.2%	68.728 ***
手の長さ	5.2%	4.3%	0.545
足の長さ	6.1%	13.0%	15.031 ***
足の太さ	7.5%	36.9%	137.417 ***
ひふの色	4.5%	6.1%	1.442
つめ	9.2%	17.0%	15.022 ***
<b>(第二次性徴に伴う体の変化)</b>			
声	8.4%	15.0%	11.455 ***
自分のにおい	4.5%	6.3%	1.761
毛ぶかき	3.9%	16.5%	47.346 ***
むねの大きさ	0.5%	6.9%	31.105 ***
おしりの大きさ	0.4%	6.9%	33.711 ***
気になるところはない	23.7%	7.8%	52.074 ***

(\*\*\*:  $p < 0.001$ , \*\*:  $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$ )

連性を持つのは、「顔の形」「足の太さ」「毛深さ」の3つであることが確認できる。なお、「顔の形」に関しては男子で40.9ポイント、女子で27.7ポイントの差があり、男女ともにいじめ被害傾向との関連が大きいことがわかる。また男子のみでいじめ被害と関連を持つのは、「鼻」「体重」の2つであり、女子のみでいじめ被害と関連を持つのは、「手の長さ」「足の長さ」「ひふの色」「つめ」「むねの大きさ」「おしりの大きさ」の6つである。

これらの結果から、女子のほうがより容姿のコンプレックスの有無といじめ被害傾向が結びつきやすい傾向があることがうかがえる。また女子においては、顔立ちのコンプレックスは、いじめ被害傾向とは関連を持たず、どちらかと言えば、スタイルや第二次性徴に伴う体の変化に関するコンプレックスの有無が、いじめ被害傾向と関連を持ちやすいことが明らかになった。

### 3. B. 課題 2 「容姿へのコンプレックスといじめ被害傾向の関連性は、仲間集団への関わり方によって異なるのか」の検証

#### 3. B. 1. クロス集計

続いて、課題 2 の検証を行うが、分析に先立って、仲間集団の関わり方といじめ被害傾向の関連性について確認しておく。その結果を示したのが、表 3 である。表 3 を確認すると、男女ともに集団適応性が低い児童ほど、いじめ被害傾向があることが確認できる。のちの分析では、この関連性を踏まえた上で、集団適応性の高群と低群それぞれの容姿のコンプレックスの有無といじめ被害傾向の関連性を互いに比較して分析を行っていく<sup>10)</sup>。

課題 2 の分析を行う。課題 1 の検証時と同様、男子を仲間集団への関わり方の違いで分類し、容姿へのコンプレックスの有無といじめ被害傾向の関連性を示したのが表 4 である。表 4 を確認すると、男子は最もポイント差が大きかった「顔の形」を除けば、すべて集団適応性高群の児童のみコンプレックスの有無といじめ被害傾向の関連性が確認できる。つまり、課題 1 で関連性が確認された「顔の形」「鼻」「体重」「足の太

さ」「毛深さ」のうち、「体重」「足の太さ」に関しては、仲間集団に適応している児童のみいじめ被害と関連を持つということである。なお、集団適応性高群の児童のみ「ウエストのサイズ」や「自分のにおい」に関してもいじめ被害と関連を持つことが確認できる。

続いて、女子の分析を行う。女子を仲間集団への適応性ごとに容姿のコンプレックスといじめ被害の関連性を示したのが表 5 である。女子の場合、男子とは異なり、集団適応性高群の児童には、容姿のコンプレックスといじめ被害の関連性は確認できない。つまり、課題 1 の検証で関連性が指摘された「顔の形」「足の長さ」「ひふの色」「つめ」「むねの大きさ」がいじめ被害と関連を持つのは、仲間集団に適応していない児童だけであるという結果が導き出される。なお、集団適応性低群の児童のみ、「顔の大きさ」「歯」「体重」「声」「毛ぶかさ」「おしりの大きさ」についても、いじめ被害傾向との関連性が確認された。これらの結果より、女子においては集団に適応していない児童の場合においてのみ、20項目中11項目の身体的違和感がいじめ被害と関連を持つことが示されたということが明らかになった。

表 2 容姿のコンプレックスの有無といじめ被害傾向の関連 (男女比較)

	男子			女子		
	気になる (n)	気にならない (n)	カイ2乗値	気になる (n)	気にならない (n)	カイ2乗値
<b>(顔立ち)</b>						
顔の形	70.3% (37)	29.4% (493)	26.291 ***	56.4% (39)	28.7% (487)	12.965 ***
顔の大きさ	42.1% (19)	31.9% (511)	0.873	38.0% (50)	30.0% (476)	1.344
目	32.8% (67)	32.2% (463)	0.011	40.3% (77)	29.2% (449)	3.789
鼻	50.0% (38)	30.9% (492)	5.892 *	36.4% (77)	29.8% (449)	1.311
歯	34.3% (137)	31.6% (393)	0.353	33.3% (129)	30.0% (397)	0.515
おでこ	40.0% (25)	31.9% (505)	0.718	40.0% (60)	29.6% (466)	2.690
かみの毛	38.9% (54)	31.5% (476)	1.207	32.0% (125)	30.4% (401)	0.111
<b>(スタイル)</b>						
身長	38.5% (143)	30.0% (387)	3.442	28.2% (142)	31.8% (384)	0.631
体重	39.7% (136)	29.7% (394)	4.636 *	33.5% (233)	28.7% (293)	1.407
ウエストのサイズ	45.5% (22)	31.7% (508)	1.827	35.8% (106)	29.5% (420)	1.589
手の長さ	39.3% (28)	31.9% (502)	0.667	50.0% (22)	30.0% (504)	3.972 *
足の長さ	42.4% (33)	31.6% (497)	1.662	47.1% (68)	28.4% (458)	9.688 **
足の太さ	56.4% (39)	30.3% (491)	11.231 ***	36.4% (195)	27.5% (331)	4.579 *
ひふの色	50.0% (24)	31.4% (506)	3.618	51.5% (33)	29.4% (493)	7.090 **
つめ	32.7% (49)	32.2% (481)	0.004	39.6% (91)	29.0% (435)	3.964 *
<b>(第二次性徴に伴う体の変化)</b>						
声	33.3% (45)	32.2% (485)	0.026	37.5% (80)	29.6% (446)	1.988
自分のにおい	47.8% (23)	31.6% (507)	2.664	36.4% (33)	30.4% (493)	0.512
毛ぶかさ	54.5% (22)	31.3% (508)	5.214 *	42.0% (88)	28.5% (438)	6.272 *
むねの大きさ	0.0% (2)	32.4% (528)	0.956	52.9% (34)	29.3% (492)	8.362 **
おしりの大きさ	0.0% (2)	32.4% (528)	0.956	45.7% (35)	29.7% (491)	3.914 *

(\*\*\*:p<0.001, \*\*:p<0.01, \*:p<0.05)

表 3 集団適応性といじめ被害傾向の関連

性別	集団適応性	いじめ被害傾向		合計	有効度数
		あり	なし		
男子	集団適応性高群 (%)	25.2%	74.8%	100.0%	254
	集団適応性低群 (%)	38.2%	61.8%	100.0%	262
	合計 (%)	31.8%	68.2%	100.0%	516
1%水準で有意 p=0.002					
女子	集団適応性高群 (%)	24.6%	75.4%	100.0%	317
	集団適応性低群 (%)	41.8%	58.2%	100.0%	194
	合計 (%)	31.1%	68.9%	100.0%	511
0.1%水準で有意 p=0.000					

3. B. 2. ロジスティック回帰分析

前項ではクロス集計の結果を示し、分析を進めてきたが、この結果は、児童の他の特徴を考慮せずに関連性のみを導き出しているため、疑似相関の可能性がある。すなわち、単に人の目を意識しやすい児童が、それぞれの容姿にもコンプレックスを抱きやすい傾向がある可能性であったり、勉強が苦手、運動が苦手であるなど、他に考えられるヴァルネラビリティが相互に影響しあっている可能性を棄却できないということである。

そこで、上記の疑念を解消するため、それぞれのコンプレックス指標と上記の統制変数を同時に独立変数

として投入し、従属変数をいじめ被害傾向ありダミーとして設定したロジスティック回帰分析を男女別に行った。その結果を示したのが表 8、表 9 である。なお、独立変数に用いたコンプレックス指標は、それぞれの容姿のコンプレックスの有無同士の関連性が高いことから、各カテゴリーごとにカテゴリカル主成分分析で統合して独立変数に投入している<sup>11)</sup>。またロジスティック回帰分析に用いる変数の設定と記述統計量は、表 6、表 7 に示したとおりである。

はじめに、男子の分析結果を示した表 8 を見ると、統制変数を考慮した上でも、集団適応性高群では、顔立ち、スタイル、第二性徴の各コンプレックスが有

表 4 男子の容姿のコンプレックスの有無といじめ被害傾向の関連

	集団適応性高群			集団適応性低群		
	気になる (n)	気にならない (n)	カイ2乗値	気になる (n)	気にならない (n)	カイ2乗値
<b>〈顔立ち〉</b>						
顔の形	64.7% (17)	22.4% (237)	15.089 ***	73.7% (19)	35.4% (243)	10.949 ***
顔の大きさ	46.2% (13)	24.1% (241)	3.193	33.3% (6)	38.3% (256)	0.061
目	32.3% (31)	24.2% (223)	0.934	31.4% (35)	39.2% (227)	0.777
鼻	41.7% (12)	24.4% (242)	1.813	54.2% (24)	36.6% (238)	2.865
歯	29.0% (62)	24.0% (192)	0.640	38.0% (71)	38.2% (191)	0.001
おでこ	25.0% (12)	25.2% (242)	0.000	53.8% (13)	37.3% (249)	1.425
かみの毛	25.0% (24)	25.2% (230)	0.001	50.0% (30)	36.6% (232)	2.010
<b>〈スタイル〉</b>						
身長	28.8% (73)	23.8% (181)	0.693	47.8% (67)	34.9% (195)	3.510
体重	36.2% (69)	21.1% (185)	6.121 *	44.3% (61)	36.3% (201)	1.251
ウエストのサイズ	55.6% (9)	24.1% (245)	4.563 *	36.4% (11)	38.2% (251)	0.016
手の長さ	42.9% (14)	24.2% (240)	2.452	35.7% (14)	38.3% (248)	0.038
足の長さ	28.6% (14)	25.0% (240)	0.090	52.6% (19)	37.0% (243)	1.816
足の太さ	57.9% (19)	22.6% (235)	11.649 ***	50.0% (18)	37.3% (244)	1.147
ひふの色	41.7% (12)	24.4% (242)	1.813	54.5% (11)	37.5% (251)	1.305
つめ	28.6% (21)	24.9% (233)	0.138	34.6% (26)	38.6% (236)	0.154
<b>〈第二性徴に伴う体の変化〉</b>						
声	34.8% (23)	24.2% (231)	1.233	28.6% (21)	39.0% (241)	0.891
自分のにおい	75.0% (8)	23.6% (246)	10.870 ***	30.8% (13)	38.6% (249)	0.317
毛ぶかさ	37.5% (8)	24.8% (246)	0.663	61.5% (13)	36.9% (249)	3.166
むねの大きさ	0.0% (1)	25.3% (253)	0.338	0.0% (1)	38.3% (261)	0.620
おしりの大きさ	0.0% (1)	25.3% (253)	0.338	0.0% (1)	38.3% (261)	0.620

(\*\*\*: p<0.001, \*\*: p<0.01, \*: p<0.05)

表 5 女子の容姿のコンプレックスの有無といじめ被害傾向の関連

	集団適応性高群			集団適応性低群		
	気になる (n)	気にならない (n)	カイ2乗値	気になる (n)	気にならない (n)	カイ2乗値
<b>〈顔立ち〉</b>						
顔の形	28.6% (21)	24.3% (296)	0.191	88.9% (18)	36.9% (176)	18.126 ***
顔の大きさ	22.6% (31)	24.8% (286)	0.076	70.6% (17)	39.0% (177)	6.371 *
目	34.1% (44)	23.1% (273)	2.478	48.4% (31)	40.5% (163)	0.668
鼻	28.0% (50)	24.0% (267)	0.369	53.8% (26)	39.9% (168)	1.806
歯	19.5% (77)	26.3% (240)	1.440	55.1% (49)	37.2% (145)	4.804 *
おでこ	34.3% (35)	23.4% (282)	1.987	54.5% (22)	40.1% (172)	1.670
かみの毛	20.3% (74)	25.9% (243)	0.978	49.0% (49)	39.3% (145)	1.408
<b>〈スタイル〉</b>						
身長	20.7% (92)	26.2% (225)	1.092	43.5% (46)	41.2% (148)	0.074
体重	23.5% (132)	25.4% (185)	0.153	48.9% (94)	35.0% (100)	3.869 *
ウエストのサイズ	20.4% (54)	25.5% (263)	0.629	54.2% (48)	37.7% (146)	4.042 *
手の長さ	38.5% (13)	24.0% (304)	1.403	66.7% (9)	40.5% (185)	2.409
足の長さ	30.0% (40)	23.8% (277)	0.718	74.1% (27)	36.5% (167)	13.473 ***
足の太さ	29.3% (116)	21.9% (201)	2.183	48.6% (72)	37.7% (122)	2.215
ひふの色	38.9% (18)	23.7% (299)	2.099	66.7% (15)	39.7% (179)	4.149 *
つめ	31.5% (54)	23.2% (263)	1.659	55.9% (34)	38.8% (160)	3.384
<b>〈第二次性徴に伴う体の変化〉</b>						
声	18.9% (37)	25.4% (280)	0.730	57.9% (38)	37.8% (156)	5.063 *
自分のにおい	27.8% (18)	24.4% (299)	0.104	53.8% (13)	40.9% (181)	0.838
毛ぶかさ	26.0% (50)	24.3% (267)	0.062	63.2% (38)	36.5% (156)	8.903 **
むねの大きさ	18.8% (16)	24.9% (301)	0.311	82.4% (17)	37.9% (177)	12.629 ***
おしりの大きさ	17.6% (17)	25.0% (300)	0.469	76.5% (17)	38.4% (177)	9.235 **

(\*\*\*:p<0.001, \*\*:p<0.01, \*:p<0.05)

意にいじめ被害傾向に有意な影響を与えていることが確認できる。そして、集団適応性低群においては、モデル2とモデル3において尤度比のカイ二乗検定が有意ではなく、それぞれのモデルが成立していないことに留意しなければならないが、顔立ちのコンプレックス以外のコンプレックスがいじめ被害傾向に有意な影響を与えていないことが確認できる。

続いて、女子の結果を示した表9を確認する。すると、集団適応性高群においては、モデル1～3すべてのモデルが成立しておらず、かつ顔立ち、スタイル、第二次性徴のいずれのコンプレックスもいじめ被害傾向に有意な影響を与えていないことがわかる。逆に集団適応性低群の児童では、3つのコンプレックスがすべて有意な影響を与えていることが確認できる。よって、先に検証したクロス集計の分析結果は、他の要因を統制した上でも同様の結果が導き出されることが示された。

#### 4. 結論

これまで本稿では、2つの分析課題の検討を通して、「児童の身体的特徴の自己認識といじめ被害傾向の関

連性はどのような小学生文化のもとで機能しているのか」という問いに接近してきた。その結果、明らかになったのは以下の2点である。

第1に男子と女子の両方の小学生文化において、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向は関連性を持つ。なお、男子に比べ、女子はその様相が色濃い。第2に男子は集団に適応している児童において、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向が関連を持ちやすく、逆に女子では集団に適応していない児童のみ、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向が関連を持ちやすい。以上の2つの知見を合わせると、本稿の問いには、次のように答えることができる。すなわち、確かに児童の自己認識のもとでは、容姿といじめ被害傾向は関連を持つが、男子は仲間集団に適応しているという条件のもとで、そして女子は仲間集団に適応していないという条件のもとでその関連性は機能する。

では、なぜ男子児童と女子児童で集団の適応性によって、容姿のコンプレックスといじめ被害の関連性が異なるのだろうか。最後に、本稿で得られた知見と既存の研究の知見を照らし合わせ、本稿のインプリケーションを述べたい。

まず女子に関しては、既存の研究において、「相手

表6 ロジスティック回帰分析に用いる変数の設定

学年	4年生=4、5年生=5、6年生=6
勉強が苦手ダミー	「勉強がとくい」(5件法)という質問項目に対して、「ぜんぜんちがう」と回答。
運動が苦手ダミー	「運動がとくい」(5件法)という質問項目に対して、「ぜんぜんちがう」と回答。
人の目が気になるダミー	「人からどう思われているか気になる」(5件法)という質問項目に対して、「とてもある」または「わりとある」と回答。
【顔立ち】 コンプレックス	「顔立ち」に関する6つの質問項目(多項選択式)をカテゴリカル主成分分析で統合し、標準化。
【スタイル】 コンプレックス	「スタイル」に関する7つの質問項目(多項選択式)をカテゴリカル主成分分析で統合し、標準化。
【第二次性徴】 コンプレックス	「第二次性徴」に関する5つの質問項目(多項選択式)をカテゴリカル主成分分析で統合し、標準化。
いじめられやすいダミー	「いじめられやすいタイプだ」(5件法)という質問項目に対して、「とてもある」「わりとある」「少しある」と回答。
集団適応性	「友だちが多い」(5件法)と「たいていの人から好かれる」(5件法)という質問項目を逆転して合算。

表7 ロジスティック回帰分析に用いる変数の記述統計量

	性別	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
学年	男子	557	4.000	6.000	4.984	0.792
	女子	539	4.000	6.000	4.980	0.777
勉強が苦手ダミー	男子	532	0.000	1.000	0.179	0.383
	女子	525	0.000	1.000	0.200	0.400
運動が苦手ダミー	男子	535	0.000	1.000	0.097	0.297
	女子	528	0.000	1.000	0.134	0.341
人の目が気になるダミー	男子	537	0.000	1.000	0.285	0.452
	女子	534	0.000	1.000	0.558	0.497
【顔立ち】 コンプレックス	男子	557	-0.727	6.020	-0.158	0.874
	女子	540	-0.727	5.508	0.163	1.092
【スタイル】 コンプレックス	男子	557	-0.847	3.596	-0.325	0.740
	女子	540	-0.847	4.016	0.335	1.117
【第二次性徴】 コンプレックス	男子	557	-0.452	3.728	-0.242	0.564
	女子	540	-0.452	7.318	0.249	1.258
いじめ被害傾向ありダミー	男子	530	0.000	1.000	0.323	0.468
	女子	526	0.000	1.000	0.308	0.462
集団適応性	男子	526	2.000	10.000	6.411	1.939
	女子	518	2.000	10.000	6.786	1.695

に悪いところがあるから」という理由でいじめを正当化する傾向があることが指摘されていた(久保田2003)。この指摘を本稿の知見と合わせて解釈するならば、女子は集団に適応していない児童に対して、身体的特徴を「正当な」理由としていじめを行う文化があり、それゆえ、たとえ実際には身体的特徴がいじめの直接の原因ではなかったとしても、いじめの被害を受けた児童がいじめを受けた理由を自らの身体的特徴に求めやすく、容姿へのコンプレックスを持ちやすい可能性が推察できる。そして男子においては、いじめ加害を正当化するのは、「遊びやふざけだと思っ

ていたから」ということが指摘されていた(久保田2003)。この知見と本稿で得られた知見を合わせると、集団に適応している男子児童に対しては身体的特徴をからかったり、ふざけたりしてもよいという小学生文化が存在し、加害者がたとえ意識していなかったとしても、その行為がいじめへと発展していく可能性が考えられるだろう。

つまり、本稿の分析からは、男女で身体的特徴といじめ被害の関連性をめぐる異なった小学生文化の存在がある可能性があり、その違いを念頭に置いた場合、男子においては集団に適応している児童であっても、

表 8 男子のいじめ被害傾向の規定要因（ロジスティック回帰分析）

		モデル1		モデル2		モデル3	
		回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
集団 適応性 高群	学年	-0.396	0.673 *	-0.451	0.637 *	-0.409	0.664 *
	勉強が苦手ダメー	0.753	2.123	0.632	1.882	0.727	2.068
	運動が苦手ダメー	2.343	10.415 **	2.202	9.046 **	2.312	10.098 **
	人の目が気になるダメー	0.813	2.254 *	0.862	2.368 **	0.883	2.418 **
	【顔立ち】コンプレックス	0.360	1.433 *				
	【スタイル】コンプレックス			0.531	1.701 **		
	【第二次性徴】コンプレックス					0.514	1.672 *
	(定数)	0.394	1.483	0.757	2.131	0.518	1.679
	Nagelkerke決定係数	0.167		0.179		0.160	
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.000		p=0.000		p=0.000	
有効度数	248		248		248		
集団 適応性 低群	学年	-0.127	0.881	-0.136	0.873	-0.153	0.858
	勉強が苦手ダメー	-0.076	0.927	-0.093	0.912	-0.106	0.899
	運動が苦手ダメー	0.710	2.034	0.734	2.084	0.746	2.109 *
	人の目が気になるダメー	0.536	1.709	0.575	1.777	0.662	1.939 *
	【顔立ち】コンプレックス	0.330	1.392 *				
	【スタイル】コンプレックス			0.218	1.243		
	【第二次性徴】コンプレックス					-0.223	0.800
	(定数)	-0.023	0.977	0.049	1.051	-0.006	
	Nagelkerke決定係数	0.068		0.053		0.050	
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.021		p=0.068		p=0.086	
有効度数	258		258		258		

(\*\*\* : p<0.001, \*\* : p<0.01, \* : p<0.05)

表 9 女子のいじめ被害傾向の規定要因（ロジスティック回帰分析）

		モデル1		モデル2		モデル3	
		回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
集団 適応性 高群	学年	0.086	1.090	0.084	1.088	0.080	1.084
	勉強が苦手ダメー	-0.127	0.881	-0.125	0.882	-0.139	0.870
	運動が苦手ダメー	0.238	1.268	0.232	1.261	0.276	1.317
	人の目が気になるダメー	0.569	1.766 *	0.563	1.755	0.637	1.892 *
	【顔立ち】コンプレックス	0.025	1.026				
	【スタイル】コンプレックス			0.029	1.029		
	【第二次性徴】コンプレックス					-0.134	0.875
	(定数)	-1.914	0.148 *	-1.902	0.149 *	-1.909	0.148 *
	Nagelkerke決定係数	0.025		0.025		0.030	
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.378		p=0.377		p=0.271	
有効度数	313		313		313		
集団 適応性 低群	学年	0.355	1.426	0.224	1.251	0.252	1.287
	勉強が苦手ダメー	-0.020	0.980	0.041	1.042	0.054	1.056
	運動が苦手ダメー	0.673	1.960	0.555	1.741	0.458	1.581
	人の目が気になるダメー	1.201	3.323 ***	1.275	3.580 ***	1.193	3.296 ***
	【顔立ち】コンプレックス	0.703	2.019 ***				
	【スタイル】コンプレックス			0.301	1.351 *		
	【第二次性徴】コンプレックス					0.418	1.519 **
	(定数)	-3.081	0.046 **	-2.459	0.085 *	-2.561	0.077 *
	Nagelkerke決定係数	0.276		0.205		0.244	
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.000		p=0.000		p=0.000	
有効度数	190		190		190		

(\*\*\* : p<0.001, \*\* : p<0.01, \* : p<0.05)

身体的特徴をからかわれている場合には、早期の対応が必要になること。そして女子の場合には、たとえ身体的特徴をいじめの理由として挙げられている場合であっても、それがいじめの直接的な原因ではなく、集

団への適応が困難になった結果として、事後的に身体的特徴がいじめの要因として語られている可能性を考慮する必要があることなどが挙げられる。

ただし、本稿の分析は、因果関係の特定が難しく、



今回得られた分析結果の多くは、解釈の余地が大きい。また、実際にいじめられた経験があるかどうかを従属変数として設定しているわけではなく、あくまでも、個人の自己認識として「いじめられやすいタイプ」かどうかを問う質問項目を代理指標として分析を進めているため、実際にいじめ被害にあったかどうかは検証することができないという課題がある。そのため、本稿の分析は、あくまでも仮説の提示とてとどめておく必要があるだろう。

しかしながら、本稿の分析で明らかになったこれらの点は、これまでのいじめ研究では、まったく指摘されてこなかった点であり、いじめを早期発見、対応することが求められる昨今の教育現場に一定の貢献を成し得ることができたと考えることができる。

### 【付記】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「モノグラフ小学生ナウ 子どもはやせ願望—見た目を気にする子どもたち—, 2001」(ベネッセ教育総合研究所(寄託時:ベネッセコーポレーション))の個票データの提供を受けました。なお本研究はJSPS科研費JP15H06054, JP16H05923の助成を受けたものです。

### 〈注〉

- 1) 谷本奈穂『美容整形と化粧の社会学——プラスチックな身体』新曜社, 2008年。
- 2) 北条かや『整形した女は幸せになっているのか』星海社, 2015年。
- 3) 具体的なエピソードについては、ビューティーコロシウム制作スタッフ(2004)を参照されたい。ビューティーコロシウム制作スタッフ『ビューティー・コロシウム——美への改造計画』幻冬舎, 2004年。
- 4) 竹川郁雄『いじめと不登校の社会学——集団状況と同一化意識』法律文化社, 1993年。
- 5) 久保田真功「なぜいじめはエスカレートするのか?——いじめ加害者の利益に着目して」『教育社会学研究』第92集, 2013年, 107-127頁。
- 6) 三島浩路「親しい友人間にみられる小学生の『いじめ』に関する研究」『社会心理学研究』第19巻第1号, 2003年, 41-50頁。
- 7) 藤原正光・鶴飼彩乃「親しい友人間における『いじめ』と性差——小学生の場合」『文教大学教育学部紀要』第43号, 2009年, 71-79頁。
- 8) 久保田真功「いじめを正当化する子どもたち——いじめ行為の正当化に影響を及ぼす要因の検討」『子ども社会研究』第9号, 2003年, 29-41頁。
- 9) ベネッセ教育研究所編『モノグラフ・小学生ナウ』Vol.21-2, 2001年。
- 10) 後述するように次項では、他の変数を統制した上で容姿へのコンプレックスといじめ被害傾向の関連性を分析するが、その分析結果においても、同様の疑問が生じるため、以下に他の変数で統制した上で、集団適応性がいじめ被害傾向に与える影響をロジスティック回帰分析で示す。

表10 いじめ被害傾向の規定要因(ロジスティック回帰分析)

	男子		女子	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
学年	-0.282	0.754 *	0.161	1.175
勉強が苦手ダミー	-0.066	0.937	-0.055	0.947
運動が苦手ダミー	0.836	2.308 *	0.414	1.513
人の目が気になるダミー	0.788	2.199 ***	0.940	2.560 ***
集団適応性 (定数)	-0.220	0.802 ***	-0.279	0.757 ***
Nagelkerke決定係数	0.116		0.129	
尤度比のカイ二乗検定	p=0.000		p=0.000	
有効度数	506		503	

- 11) 3つのコンプレックス指標はカテゴリカル主成分分析により質問項目を統合して作成した。分析の結果については、表11, 表12, 表13に示したとおりである。

表11 【顔立ち】コンプレックス指標の作成（カテゴリカル主成分分析）

【顔立ち】 コンプレックス		数量化	成分負荷量
顔の形	気になる	3.590	0.660
	気にならない	-0.279	
顔の大きさ	気になる	3.773	0.543
	気にならない	-0.265	
鼻	気になる	2.880	0.504
	気にならない	-0.347	
目	気になる	2.522	0.446
	気にならない	-0.396	
おでこ	気になる	3.407	0.411
	気にならない	-0.293	
歯	気になる	1.704	0.367
	気にならない	-0.587	
かみの毛	気になる	2.213	0.396
	気にならない	-0.452	
寄与率		23.5%	

表12 【スタイル】コンプレックス指標の作成（カテゴリカル主成分分析）

【スタイル】 コンプレックス		数量化	成分負荷量
身長	気になる	1.653	0.236
	気にならない	-0.605	
体重	気になる	1.360	0.699
	気にならない	-0.735	
ウエストの サイズ	気になる	2.716	0.644
	気にならない	-0.368	
手の長さ	気になる	4.483	0.246
	気にならない	-0.223	
足の長さ	気になる	3.090	0.489
	気にならない	-0.324	
足の太さ	気になる	1.885	0.744
	気にならない	-0.531	
ひふの色	気になる	4.232	0.311
	気にならない	-0.236	
つめ	気になる	2.583	0.277
	気にならない	-0.387	
寄与率		24.8%	

表13 【第二次性徴】コンプレックス指標の作成（カテゴリカル主成分分析）

【第二次性徴】 コンプレックス		数量化	成分負荷量
声	気になる	2.751	0.475
	気にならない	-0.363	
自分の におい	気になる	4.194	0.577
	気にならない	-0.238	
毛ぶかき	気になる	2.980	0.516
	気にならない	-0.336	
むねの 大きさ	気になる	5.141	0.630
	気にならない	-0.195	
おしりの 大きさ	気になる	5.208	0.614
	気にならない	-0.192	
寄与率		32.0%	

(指導教員 本田由紀教授)